

千葉よ 浦和に負けるなよ

千葉だ 千葉だ 千葉・千葉だ
千葉だ 千葉だ 千葉・千葉だ
千葉に 千葉が いくつある
駅を数えて おどろくな

千葉の東に 東千葉
千葉の西には 西千葉が
千葉の南に 本千葉も
海のそばには 千葉みなと

まだまだあるよ 京成に
千葉の手前に 新千葉が
千葉の隣に 千葉中央
その先進めば 千葉寺も

千葉だ 千葉だ 千葉・千葉だ
千葉だ 千葉だ 千葉・千葉だ
千葉に 千葉が もうひとつ
モノレールには 千葉公園



ある芸人が「浦和の歌」という歌を歌っていた。

浦和・南浦和・北浦和・東浦和・西浦和・中浦和・武蔵浦和と、「浦和」と名が付く駅が七つあるということを書いた替え歌。元歌は山本リンダが歌った「狙いうち」という歌で、歌詞の中に出てくる「ウララ・ウララ」の繰り返しを「浦和」に置き換えて作った面白い歌だった。

よくよく千葉の地図を見れば、千葉にも「千葉」と名が付く駅は沢山あるので、「浦和に負けるな」の意気で更なる替え歌「千葉」バージョンを作ってみた。

さて、十の千葉駅は・・・

東千葉駅は、千葉駅から北東に向かう総武本線に乗ると最初の停車駅で、各駅停車しか停まらない。駅の上には椿森陸橋が架かり交通の要衝ではあるが、駅の周りがどことなく侘しい。東千葉駅のやや千葉駅寄りの所に引込み線が分岐して広がっている所があるが、これが旧千葉駅の名残である。両国から来た総武本線は左に大きくカーブを切って千葉駅に入った。内房線・外房線はここでスイッチバックして逆編成となって蘇我方面へ走った。駅の西側から北西に向かう国道126号線に沿って陸軍の主要施設が並び、軍用鉄道が習志野の原野に向かって走っていた。昭和40年(1965年)に**千葉駅**が現在の場所に移転した時に、旧駅はやや北へ移り東千葉駅として生まれ変わった。個人的な意見だが、東千葉などという無粋な駅名にするよりも、駅前に広がる「椿森」という地名を駅名とした方が味があってよかったのと思う。

千葉駅から北西へ1.4Kmの**西千葉駅**は、軍事技術の研究開発を目的として東京帝国大学第二工学部ができたことで昭和17年(1942年)に開業した駅。前述の様に軍都千葉の要であったこの辺りには陸軍の施設が列をなして並んでいた。

昭和 20 年の終戦後に、第二工学部は規模を縮小して東京大学生産技術研究所と名を変えた。また、軍隊の施設が消えた後にいくつも学校が出来て、名実共に学生の街となったのだが、見方を変えると軍国日本の軍都千葉の痕跡を抹消したということもできる。

東京大学第二工学部の跡地は千葉大学のキャンパスとなり、僅かに残っていた生産技術研究所の機能は 2017 年に柏に移転した。

本千葉駅は長い歴史を持つ駅である。明治 29 年（1896 年）に房総鉄道が開通したときに寒川駅として始まった。場所は、現在の京成電鉄の千葉中央駅の位置だった。明治 35 年（1902 年）に本千葉駅と改称された。

房総鉄道は明治 42 年（1907 年）に国有化されて、房総東線・西線となった。

太平洋戦争で千葉は空襲に遭い、駅周辺は大きな被害を受けた。戦後の復興事業の一環として、昭和 53 年（1958 年）に約 750m 蘇我寄りの現在の位置で再スタートし、元の本千葉駅は復興整備の結果、京成電鉄の千葉中央駅となった。

本千葉という町名は、室町時代に創建された千葉氏の居城（亥鼻城）の直下の町として「本千葉」と言われていたのが由来とされている。

平成 2 年（1990 年）に全線開通した京葉線に**千葉みなと駅**が出来た。東京湾岸を埋め立てて出来た海浜ニュータウンを走り、千葉港を目の前にした所に駅が出来た。「千葉港」とせずに「千葉みなと」としたのは何故だかわからない。2000 年の歴史を持つ内陸の町とは違って、今日・明日が歴史年表への新たな刻みとなる新しい町である。

先に述べたように、JR の千葉駅は、現在の東千葉駅の位置から移転したのだが、**京成千葉駅**も同様に開通時の場所と今の場所は異なっている。

京成電鉄の始まりは 1912 年の帝釈人車軌道に始まる。押上を起点として千葉まで開通したのは 1921 年、京成上野駅まで全通したのは 1933 年のこと。

開通時の京成千葉駅（当時は千葉駅と言っていた）は、現在の中央公園の場所にあった。稲毛方面から海岸に近いところを走って来た京成千葉線は、内房・外房へ行く房総線を跨いで終着駅に入った。昭和初期の地図を見ると、この京成線の千葉駅のほかに前述の椿森陸橋の下に旧千葉駅があり、現在の千葉駅の北口あたりには軍用鉄道の千葉駅もあった。

やがて京成千葉駅の周辺にはデパートや公共施設が建ち、歓楽街の栄町も賑わい繁華な町になった。

国鉄の千葉駅周辺には陸軍の施設が建ち並び、京成の千葉駅だけが異なる景観だったようだ。

1958 年の本千葉駅の移転が済んだ後、京成線は経路が大きく変わった。中央公園付近に入っていた線路はなくなり本千葉方面に向かうようになり、現在の JR 千葉駅に隣接した場所に国鉄千葉駅という京成線の駅ができ、本千葉駅の跡地に京成千葉駅ができた。

その後、国鉄千葉駅は京成千葉駅に改称し、京成千葉駅は**千葉中央駅**に改称した。

このあたりの話は文字で読んでも理解は難しく、時系列で図示したほうがわかりやすいのだが、スペースの関係で省略することにした。

新千葉駅は大正 12 年（1923 年）開業の駅。開業時の町の名からとって駅名にしたのだが、今は JR（当時は国鉄）の千葉駅も同じ町内にある。

前述のように、京成線が JR 千葉駅に接続する駅を持たなかった時代には、新千葉駅から歩いて千葉駅に乗り換えたという話を聞いたことがある。

昔は登戸（のぶと）海岸に面した入江のようなところだった。新千葉の南西に隣接する新田町や新町などの町の名を見ると、新しく開発された「新田」であったことがうかがえる。亥鼻城を中心に置いて町を見れば、この地は海岸の「新地」だったのかもしれない。

千葉中央駅から市原市のちはら台までを走る京成千原線は1995年（平成7年）に全線開通。これにより千葉市の南部の内陸部の交通利便性が改善し、新しい町や学校が広がって行った。当初は小湊鉄道が海士有木駅から本千葉への路線申請をしていたのだが、資金不足で着工できず第三セクターの千葉急行に譲渡した。千葉急行は京成電鉄と千葉県・千葉市・市原市などが出資して作った会社で、後に筆頭株主である京成電鉄の手に移った。

千葉中央駅の次にできたのが千葉寺駅。千葉城がある亥鼻山の南に続く葛城の山の南麓にあるお寺が駅名になった。千葉寺の正式名称は、真言宗豊山派海上山千葉寺（せんようじ）。709年（和銅2年）に、東国を巡っていた行基が十一面観音を安置したのが始まりと言われている。千葉氏が祈願所として加護してきた。

国土地理院の地形図を見ると、亥鼻城から千葉寺・青葉の森あたりは海拔20~30mの山並みになっており、西側を走る末広街道は海拔3~4mしかない。海岸線を目の前にして、小さな入江が入り組む場所で、海を見下ろすように建つ寺であったことが想像できる。

1991年に開通した千葉都市モノレールは、千葉駅を出ると左に大きくカーブして千葉公園駅に入る。江戸時代には佐倉藩の領地である寒川村と中山勘解由の領地である作草部村の境界地で、共同作業場にもなっていた。綿打池の付近が両村の境界になっており、境界を巡る争いも何度かあったらしい。1908年（明治41年）に、大日本帝国陸軍の鉄道連隊が設置された。大正時代の地図を見ると、綿打池の北側に工兵作業場が広がり、その北側には鉄道連隊の材料廠があり、穴川まで広がっている。現在モノレールが走っている国道126号線には軍用鉄道の線路が敷かれて、線路の反対側には連隊の隊営、歩兵学校、演習場などが連なり、陸軍の墓地もあった。

殉職した鉄道第一連隊の荒木大尉を悼んで1933年（昭和8年）に銅像が建ち、一部エリアは荒木山公園と言われたこともある。

昭和初期に地図を見ると、綿打池の西側の高台に「吾妻台」と記されている。現在生涯学習センターや中央図書館がある弁天町の一帯を吾妻台と言っていたようだ。

終戦後1946年（昭和21年）に復興計画の一環として、鉄道連隊跡地に千葉公園が開設されることになった。

千葉都市モノレールは、高い所を走っているのので周辺の景色を楽しむことができる。しかし中途半端なコースを遠廻りして走っているのので、部分では便利な交通機関ではあるが全体としてみると、どことなく使いにくさがあり残念な気もする。

しめくくり

明治時代の富国強兵を出発点にして、「軍隊の街」として栄えた千葉。戦争の流れにより様々に変化し、その中で鉄道路線や駅に大きな変化があった。鉄道路線の変化は国有鉄道のみならず、民営鉄道にも大きな影響を与えてきたように感じる。

道路があって街が出来て鉄道が出来る中で、街の中心地と鉄道の駅との関係が明らかになっていくのが良く見る景色だが、千葉はそれを感じにくい。街の中心・街の機能・人々の動きなどと深くつながったターミナル駅の存在が醸成されずに来てしまった感じがしてならない。

それは現代にしても言えることで、JR千葉駅が大改修されて立派な駅ビルができて名を馳せたが、駅ビルを一步出ると「目玉」がなく人の動きも多くはない。名古屋や広島のように、旧の街から離れたところに出来た鉄道の主要駅の周りには、新しい街（街の玄関）が形成されている

千葉にある、千葉と名が付く十の駅を中心に街を眺め直して見入ると、千葉市の歩んできた道程がわかり、その中に見えてくるものは（偏見かもしれないが）「歴史に翻弄された街」という印象が拭えない。しかし、それが「千葉の良さ」なのかもしれない。